

「国語の力」の成立過程 1

— 国語教育學說史研究 —

野地潤家

「国語の力」の成立契機の一つについて、西尾実先生は、つぎのように述べていられる。

「大正八年、先生は、外遊を機として、東大を退かれ、帰朝後は、東京高等師範学校に転じられた。大正十年、松本女子師範学校に在職していたわたくしは、県の祝学から、『県下中等学校における国語教育の臨時祝学委員を迎えたいが、適當な学者はないだろうか。』という相談を受けた。わたくしは、自信を以て、垣内先生の名をあげて答えた。その年の秋、県内中等学校の視察があり、最後に長野の師範学校で、中等学校国語科担任者に対する講演があった。その講演筆記は『国語の力』に附録せられている。

『国語教授と国語教育』である。垣内先生の国語教育に関する御考察を、はじめて伺ったわたくしは、垣内先生を長野駅頭にお見送りして、『国語教育に関する所説は、雑誌をみても、著述をみてもあまりに低調なように思われます。先生のようなお考えを是

非御発表願いたい。』と申しあげたところ、先生は、案外気がるに、『書きましようか。ほくは、書きはじめる早いですよ。』といわれた。翌年五月、先生から送られた小包を開いてみると、黒地に『国語の力』といふ文字をうかせ、背を緑にした表装の、あかね色の見返しに、『大兄のおすすめによりて筆を執りましたので。』と墨書された一本であった。もとより、先生としては、多年胸中に貯えられていた蘊蓄の披瀝であったことはいうまでもないが、はじめて国語教育の講師として長野県に出張されたことが、この著を公にされる機縁の一端であったかと思う。^{注1}（有朋堂版「国語の力」所収、「国語の力」の現代的意義、二—三）

これによって、「国語の力」をまとめられた機縁の一つをうかがうことができる。その根底には、垣内——西尾という師弟関係があったことも認められる。また、長野講演の筆録がまとめられて、雑誌「信濃教育」（大正11年2月号）に掲載されたことも、一つの手がかりになったかと思われる。

つぎに、「国語の力」出版までの経過・事情については、不老閣書房の中西浜太郎氏が、以下のように述べている。

中西氏は大正三年の春ころ、東洋大学教授であった田部重治さんから、はじめて垣内先生に紹介され、それから注²はしばしば先生のお宅にもうかがうようになり、大正六年には「日本文学の思潮」を出版させていただくことになり、予告をしたという。「先生は愛住町から、寺町へ御越しになる、日は流れて大正も十年となりました。先生の御著を早く出させて頂きたい、今日は強くお願いしてみようと、固い決心で出かけた日も、早何十回になるか分からない。先生のお話しに恍惚として、お願いの言葉もださずに帰ったこともまた数しれぬ。今日こそはと、秋の暖い日、山王山の石段の一階、心もこめてお伺いした。御在宅で、二階に御とおし下さった。すぐれて晴々しい御声で、長野での御講演のお話をして下さった。先生の所説を最もよく理解されたのは、長野県であったと非常にお喜びであった。この様に理解する人が多くなったから本を出してもよいと、プランを御示めし下さったのが彼の『国文学叢書』十二巻である。翌十一年の一月から、第一巻『国語の力』の原稿をいただくことになり勇躍して帰途についた。その年の暮はながかった。

明くれば大正十一年一月も二、三回御伺いした。二月の初めに漸く三十頁計りの原稿をいただいたときはほんとに嬉しかった。よく、あの高い山王山の石段を踏みはずさずに降りたと思う位、飛ぶようにして、春日町の印刷所へ駆けつけた。それから殆んど毎日、原稿をいたどぎに向った。休みの日もありました。三十枚四十枚といただいては印刷所に送る。御伺して原稿をいただけた日の先生のお顔は誠に晴やかに感ぜられましたが、ただけない日は、鈍感な

私にも、そのお苦悩のほどがいかにばかりであるかを、痛く感ぜられました。雪の降る日雨の夜などのゆきまに、畫家が絵をかぬ間の苦しみの話など思い浮べ、坂下の汎濫した藤の中へ落ちこんだときなどでも、弱い心を引きしめました。

製本の意匠も、先生に見本をいただきましたので、どうか先生の御意に副うようと、先生の処へお伺いしない日は、その方へ飛び歩きました。江戸川の紙器会社を尋ねても、見本のようなクロスは先ず機械から造らねばならないとのことに、到底これは問題にならず、方々尋ね廻ったあげく、向島の百花園の隣りに、染物の名人が居ることになり、尋ねて行く。七十を已にいづく過ごせしかと思わるゝ枯骨に、まだ陰のこる名人肌の一徹、軽くは中々引受けない。いろ／＼事情を話してすると、やって見ようと一言、やっと安心して帰宅、早速材料をとどけました。

それからは、先生の御用のないときは、印刷所、向島と廻る。染物の老人は二、三度やって見たがうまくゆかない、しかしどうしてもやってやるとの強い返事でやっと安心して帰りますもの、どうかなあ？と思う心の不安から、白髭神社、あるいは浅草の観音様と合掌することもありました。

又、カットの図案です。これも先生から見本をいただきました。幸親戚に上野の美術学校出の洋画家がありましたので、見本をもとに描いて貰うことにしました。出来たものを先生にお目にかける。此の線がついてはいけぬ、これは細く、と一々御指示を受け、描きなおしする。その精密、正確さに、流石の畫家も驚いた。かくて五六回もかきなおしに、尚先生の御気に召さぬ点もありましたようですが、我慢していただきました。

感々印刷は上る。クロスも出来る。いざ製本となりました。喜んで製本所について見ますと、ところが大変です。染めました老人は旧暮生き残りで脚は違者ですが、純日本式、製本やは洋式。洋式の製本では、箔をいれるにも、薬と熱を要し、背を固めるにも、熱いにかわを使う、この熱を考慮に入れないうで染めた布である。薬熱の作用で、折角苦心して染めた色も変り、型も崩れてしまふ。さあ大変、向島へ行く、神田へ飛ぶ。染物やの老人と製本やの主人で評議したが結局うまくゆかない。余儀なく、熱加減で兎も角も進行することにした。かくて出来上ったのが『国語の力』の初版三千部であります。

永い間研鑽蓄蓄されられた思想を、更に一字一句に真に髄骨の苦をもつて著わされた『国語の力』、装幀には以上な様な不備な点がありましたが一塵世上に出ますと、忽ち全国から驚きと喜びとで迎えられました。以來十有七年、版を改むること三回、今尚昔日の如く愛読せらるることは、誠に先生の永きうみのなやみのみ魂が深く宿って居るからと思えます。

思えばながいことです。『国語の力』に書かれた御思想の端々を、私がお伺いしてからでさえ、同書が出来るまで約十年、私が御伺いした回数も幾百回に近いものと思えます。「『国語の力』出版まで、雑誌「コトバ」第8巻第1号、昭和13年2月1日、コトバの会刊、一四〇—一四二（二）」

これによれば、「国語の力」の刊行準備について、著者側・出版者側のそれぞれの事情を知ることができる。垣内先生が中西氏に話されたところからも、「国語の力」の成立に、長野講演（大正10年11月20日、長野師範学校において）が直接のきっかけになっている

ことを知る。直接のきっかけはそうであっても、「国語の力」そのものの内容は、垣内先生の胸底においてながく準備されつづけたものであった。そのことは、中西氏の右の文章の「思えばながいことです。『国語の力』に書かれた御思想の端々を、私がお伺いしてからでさえ、同書が出来るまでに十年、私が御伺いした回数も幾百回に近いものと思えます。」（同上誌、一四二—）という結びにもうかがえる。「国語の力」初版が刊行されるまでの、出版者としての苦心と活躍ぶりは、右の文章の至るところにうかがわれる。ひとりの読者として読んでも、感動をおさえることができない。

また、中西氏の文章からは、「国語の力」の執筆状況もうかがえる。中西氏の記憶によれば、大正11年の2月初めに、三十ページばかりの原稿をもらい、それから毎日原稿をもらいに出かけ、三十枚四十枚ともらっては、印刷所へ送ったという。はじめの三十ページばかりというのは、「国語の力」の「一 解釈の力」の、「一 説む力」から、一〇「センテンス・メソッドの理論的基礎」までくらいでもあったらうか。準備期間のほとんど二十余年に及ぶのに比べれば、「国語の力」の執筆期間は、かなり短期間であったといつてよからう。大正11年2月はじめには、中西氏に第一回の原稿を渡され、大正11年3月31日には、「国語の力」の「序」を書いていられるのである。

この間のことについて、垣内先生はみずから、つぎのように述べていられる。

「『国語の力』の校正にあたって居たのは恰も春の半頃であった。もう十数年以前になるが、花時になると毎年その頃の書きの生活が思出される。原稿を書き初めたのは前年（引用者注、大正10

年)の暮からで、そのまとまったのは三月の初めであつたと思う。その半頃から校正にとりかゝつたが、校正の間に新に書き加える分が出来たり、また校正の上に校正を加える必要が生じたりして、その仕事を續けて居る間に、花が咲いて、麗らかな春の日が続いていた。その頃の生活を想い起すと、レンブラントの畫面と同じような色彩が今も目の前に見えてくる。外はのどかな春の陽が輝いて居るのに、風も窓を掃切つて、電燈の下に校正を進めて居た。夜も風も区別のないような生活をつゞけて居た。」(「言語形象性を語る」、昭和15年2月11日、国語文化研究所、三一—三二六)

これによつてみても、執筆期間は、ほぼ二か月から三か月であつて、校正をしながらさらに手を入れられたことがわかる。

「国語の力」は、はじめ、「国文学習叢書」12巻の第一巻として企画されたものである。「国文学習叢書」全12巻は、つぎのように予定されていた。

- | | | |
|---|--------|-----|
| 1 | 国語の力 | (全) |
| 2 | 徒然草黄筆 | (全) |
| 3 | 古今集の調 | (全) |
| 4 | 平家物語の象 | (上) |
| 5 | 平家物語の象 | (中) |
| 6 | 平家物語の象 | (下) |
| 7 | 新古今集の影 | (全) |
| 8 | 萬葉集の響 | (全) |

- | | | |
|----|--------|-----|
| 9 | 紫文の光 | (全) |
| 10 | 芭蕉の擗 | (全) |
| 11 | 一茶の擗 | (全) |
| 12 | 国語学習辞典 | (全) |
- この叢書については、垣内先生みずから、「国語の力」序において、

「これまで『国語』を学ぶ人教える人から『国語』の学習に就いて、いつまでもこんなことをして居てもよいのかと尋ねられたことがいく度あったか知れない。併しながら同じ不安をいだいて、その答を求めて居たわたくしには、その疑いを尊重するほど、それに就いてありあわせの答をすることは慎まねばならなかつた。この叢書はようやくその答を形に現わして見たものであるが、何となく物足らぬ感じは自分でもよく知つて居る。しかし今の自分の力ではそれをどうすることもできない。

この叢書で語ることが右のようであるから、第一巻から第十二巻まで『国語』の学習の方法的考察を以て始終して居る。第一巻は研究法・批評学及び言語学的諸研究・文学概論を整理して、これを『説む』という作用の上に集め、『説方』ということを実際に結びつけて新しい仕方で話して見たいと思つたのである。第二巻より第十一巻に至る解釈は第一巻で主題とした『解(イニタープレーション)積』(『説方・批評』)を実例で証明して見たいと考へたのである。もし普通の註釈であつたらとてもそれに従うことはできないのであるが、實際の問題の考え方を取扱うために、特にそれ等の作品を選撰して解釈を試みたのである。第十二巻はそれに關聯して附加したのである。行

くは遠い研究の道程に於ける第一歩を踏み出したものに過ぎない。」(有朋堂版「国語の力」一―二六)

と述べて、叢書の意図と性格をあきらかにしていられる。

「国語の力」の成立の動機として、現場からの問いに答えるという、それも、こうした国文学習叢書の形で答えるという面のあったことを見逃がしてはならない。「国語の力」成立の契機は、国語教育学習の新生をどうしてはかるかという問題の胚胎にあったと見られるであろう。

なお、垣内先生は、「序」において、「この叢書に述べたことは、既に二十余年の間唯一人で考えもし行っても来たことであるが、それを話して見たのは附録講演が始めてである。それはどうしても、話さねばならぬところまで追いつめられたから、話さねばならなかったで、全くとりかえしのつかぬことをしてしまつたのであるが、それから思いきつてその責任を明かにするために第一巻を書くことにした。それを書き記したために新に思いついたことも少くない。」(有朋堂版「国語の力」四六)と述べて、長野講演による、私見公表への責任をあきらかにしようとして、まとめられたことをつけ加えていられる。長野講演のことについては、「言語形象性を語る」(昭和15年2月11日、国語文化研究所)においても、「帰朝して見ると、自分の職場は、自分には概ね閉ざされていた。そこで、よし、筆を把つて立ち上ろうかと考えた。内心さみしくはあったけれども、一種の昂奮を感じないでもなかつた。楽しい憶出の一つである。しかし、今から考えて、むしろ幸であつたと思うのは、その年、文学概論と文学史の講義をする位置が見つかったことと、或る地方の国語教育の視察を囑託せられたことが、自分の

生涯にとって偶然な転回点となつて、こゝに形象理論の問題に回帰する機会が再生したのである。その大要は、「国語の力」に於て披瀝した如くである。」(同上書、三〇六)と述べられ、生涯にとって偶然な転回点となつたとされている。

西尾寅先生を、媒介者・触発者としての、垣内松三先生の長野講演は、「国語の力」の成立には、非常に大きい役割をはたしたものと見えよう。さらに、「国語の力」を刊行にまで運ぶのには、中西浜太郎氏の出版者としての熱意と誠意があつて大きかつたと思われる。

つぎに、「国語の力」という書名については、垣内先生がみずから、つぎのように述べていられる。

「外はのどかな春の陽が輝いて居るのに、風も窓を締切つて、電燈の下に校正を進めて居た。夜も風も区別のないような生活をつけて居た。そして、最後にこの書物の標題を、何と名づけようかということに行きつまつた。その校正が終る間際までそれを決定することが出来なかつた。ところが、ふとしたはずみで、突然「国語の力」という文字が浮んで来た時には、何とも言えない喜びを感じた。この『力』ということばは、その後いろいろに釈解されたが、其の当時の心持及び現在まで持統けて来た、自分の学的体系的の統一原理としての『力』ということばは、実はそれより二十年も前より持統けて来た考え方を結晶したのであつて、それから今日まで、又これから後も統けようと思つて居る学説全体を象徴するよりなことはとして用いたのであつた。その時決定した『国語の力』という標題は、この文字から聯想せられる、個人々の学力とか、個人間の共通性とかいふ考え方と同じものではないが、またそれと別のものではあ

るといふ理由もない。ともかく、この標題を決定したことは、自分の学問の統一を得たと同じことである。何となく安らかな心持であった。それに、それを決定する当時の心持には、我が國に於ける學問なり教育なりの状態を觀察した結果に對して、所思を明かにする要求もあつたのである。間近の十年ほどの徒勞に近い生活の斷層が、そこに、文字を以て刻みつけられてあることを、附加えて置いてもよからうと思ふ。」（「言語形象性を語る」、三一—三三、）

「國語の力」の目次によると、

一 解 釈 の 力

二 文 の 形

三 言語の活力

四 文 の 律 動

五 國文学の体系

附録 國語教授と國語教育

となつてゐる。すでに、「解釈の力」「言語の活力」と、内容を示す章の題目に、「力」の語がみえていたのであつて、それらを統括する書名として、「國語の力」という名称が選ばれても、ごく自然である。しかし、右の文章において述べられたように、この「國語の力」という標題は、垣内学説全体をも象徴するものであつた。

なお、「國語の力」成立の根底には、垣内先生の「國語教育史

賤」の体験とその反省があることを忘れてはならない。「國語の力」

が「國文学習叢書」第一巻の形をとつて企画されたことにも、垣内先生の國語教育の新生への願いがこめられていたのである。

二

「國語の力」（大正11年5月8日、不老閣書房）の刊行に先だつて、垣内先生の随想集「石叫ばむ」が、大正8年7月8日、不老閣から刊行されている。「石叫ばむ」は、「國民生活叢書」の一つとして書かれたもので、一二ページから成る。

この「石叫ばむ」と「國語の力」とは、どういふ関連にあるか。「國語の力」の成立を考えていくのに、この問題を考えてみたい。

「石叫ばむ」の「序」は、「大正八年六月二十五日、欧米社会事業及び学事視察の途上に上るの目近みつゝ、匆忙の裡に」、つぎのようにしるされてゐる。

1 國民生活 (Privat-Leben) は國民的生活 (Öffentliche-Leben) ではない。併しながら世界の大部分は刻々に國民生活の

実力は國民生活の基礎の上に打ち建てられたる新らしき秩序の創造と信念の教養とに在らねばならぬことを強く且つ明かに意識せしむる。

2 國民的生活の研究は其の對象と其の資料とが明白であるから歴史的科學的研究が比較的に容易であるけれども、國民生活の研究（たとえば有職故実、家政学、実業教育等に関する事項）は其の對象性が不明であるために學問的価値も實際的機能も欠けて居るのである。

3 國民生活に関する研究、感想、芸術的作品等を雑誌や四季評論よりも自由な形に於て發表又は紹介して世局の推移に伴う國民生活の研究と國民的生活の開展の參考に資せんとするのがこ

の叢書を編纂する目的である。

4 この叢書は嘗て指導せる家事教育家諸氏の教育的精神の参考に資する為に、試みに我が国民生活史の立場から講述せる日本家政史の叙述を全くちがった形に書き改めたものである。又この小冊子はその序説の精神を山上の新春の印象に生かされて三の小品に分けて見たのである。多少の予料から前の計画を改めたことの当否さえ考えない内に、時は流れて今は手を加える時間之余裕もないので、このまゝ刊行する。

5 国民生活の理想は建国以来、明るく淨く正しき(直又は貞の二字をも用いる)奉仕の精神に生さんとすることであった。今や朝朗なる世界文化革新の黎明に於て我が國民的生活の品位と威厳と榮譽とのために、もっと明るい淨い正しい国民生活の意識の新生を祈らざるを得ぬ。

6 私の旅は十数年来続した私の学業の必然なる要求であつて且つ当然なる推移であるに関わらず、至純なる真実の精神を以てこの行を送らるゝ知友の厚意に対しては謝するの辞さえも知らぬ。唯、別離に際して先ずこの小冊子を獻げ、再び相見ん日まで諸君の上に幸多からんことを祈る。(「石叫ばむ」序、一―三六)

本書、本書の目的は、右の3・4によつてうかがうことが出来る。「国語の力」が国語教育の現場からの質疑に答える形をとり、「国文学叢書」に位置づけられていたのに似て、「石叫ばむ」は、垣内先生のかつての教え子である家事教育にたずさわっている人たちの教育的精神の参考に資するために、「国民生活叢書」の一

つとして、まとめられたものである。本書は、右の6にもあるように、垣内先生の外国の旅に赴かれるにあつたつての、獻呈の書ともなつている。

「石叫ばむ」の内容は、右の序の4にも述べられているように、山上の新春の印象によつて、三つの小品に分け、

一 迷彩(生活の内面性に関する五つの小説)

二 草の春(国民生活の単位及びその歴史)

三 春淺し(Humanism と Humanitarianism)

の三つから成つている。ここにいう「山上の新春の印象」とは、本書の末尾に、

「硝子窓を透して――

窓の前にはうす赤くふくらんだ芽をつけた小枝が朝の微風に揺やかに揺れて居る。浅青の色の浮んで来た向うの連山は朝日の光をうけて青混を一抹したように輝いて居る。山嶺の真上に純白な雲の塊が紺碧の天空を西の方へと徐く流れて行く。山の頂から麓の方へくの字を幾つも重ねて描いた山路の尽きるあたりから薄紫の煙霧が低く地を匍うて林や藪屋を覆むように纏れて居る。何んという静かな和やかな霞さであらう。春の光の冷ねく輝らす下に春の風の緩やかに吹く中に萬象は皆、新生の歡喜に躍つて居る。きっとあの枯野の路傍の石でさえ歡呼を擧げて居るにちがいない。(四月三日朝、仙石原にて)」「(「石叫ばむ」、一二〇―一二一)

とあるように、垣内先生にはきわめて印象ぶかく映じていた、箱根仙石原での山上の印象を指すものである。特異の「石叫ばむ」という書名^{注4}も、ここから採られたものである。

「石叫ばむ」は、序の3にもみられるように、きわめて自由な形

式を採用している。しかも、それまで研究してこられた、有職故実や国民生活史などの研究の集約が企てられている。「国語の力」がながい準備期間をへつつ、長野講演という機をえて触発され、結晶したように、「石叫ばむ」も、垣内先生の外遊が一つの機となつて、それまでの国民生活史方面の研究のまとめを思い立たれたものではないか。したがって、「石叫ばむ」と「国語の力」は、それまでの垣内先生の研究領野のそれぞれに、おのおのその結晶を与えようと思つたものと見ることができよう。

そのように研究領野のそれぞれをまとめたものであるが、「石叫ばむ」の中にみられる、たとえば、

1 「偉い人ほど拘束の多い中から自由を自分で創造するのである。勿論、外から頂戴するものじゃない。」(同上書、二二三)

2 「もうそろ／＼疲れて恐^ヤしい目つきで、他^{アザイネツス}を見まわして居るじゃありませんか。」「うんあれが自^{セルフ}に違^ヘつて来ねば世に人にまた自分に対して自己のありかど判然せぬ。判然したら始めて謙遜と平和と敬虔と静粛とが生れて来る。自分に人に世に対して真に同朋同行となれる。まだ／＼もつと苦しい寂しい思いをさせなければならぬ」

「そういう意地のわるいことをいうお前はたい誰れだ」

「わしは元初以来人性を統率する概念だ。そういう生ぬるいことをいうお前等は何ものだ。」(同上書、四〇—四一)

3 「『花をのみめづらむ人に』——この句を低誦した宗易の心には、花や草の姿でもなく、花や草で象徴された観念でもなく、きつと花盛りのような紅葉の輝くような豪華な華麗な生活

の光景が見えたことであろう。この浮薄な放縱な耽溺の生活に対する反感も伴生したことであろう。それよりもつとよく聞きとりたいのは微妙に織り込まれて居る内省の心である。」

(同上書、四八—四九)

4 「まことや一の事に透徹すれば萬の事は僻れるのである。」(同上書、五一)

5 「されば日本国民の最小生活の研究者として、生活の単位の創見者として見る時、利休よりも宗易よりも千の与四郎の名に もっと親しみを感ずるのである。」(同上書、五八)

6 「戦局の未だ終結せざる世界の面前に於て、各国は既にこの根本的研究から旧習を打破して国家の實力の涵養に鋭意を揮つて居るのを見て国民生活の現状に及べば多大の感慨なきを得ない。」(同上書、五九)

7 「然るに実際に於ては人性を荒ましめ良心を破壊せしむる暴虐なる事実が数多く吾人の面前に行われて居るのを否むことの ならぬのは遺憾である。」(同上書、一一六)

などには、「国語の力」に見られる態度や用語と共通する面を認めることが出来る。3の「内省の心」や、5の「日本国民の最小生活の研究者、生活の単位の創見者」という考えかた、見かたには、垣内先生の内省的立場がみられる。また、6・7の、「世界の面前に於て」、「吾人の面前に」などは、「国語の力」にみられる「心の面前に」という用いかたの先行例と考えることもできよう。

金原省吾氏は、その論考「『石叫ばむ』と『国語の力』」(雑誌「コトバ」、第8巻第1号、昭和13年2月1日、コトバの会刊)において、「石叫ばむ」の内容を要約して示した後、「以上の如き立場が、『石叫ばむ』の示す処であるが、これが更に『国語の力』に到

つて、この一般立場が国民言語文化の問題に集中してくる。」(同上雑誌、九六)と述べられている。「石叫ばむ」↓「國語の力」に、一つの集中化を認めているのである。

また、西尾興先生は、「『國語の力』の現代的意義」において、「石叫ばむ」にふれて、

「東大における垣内先生は、関根正直講師の後を受けて、『有職故実』の講義を担当された。わたくしが聴講したのは、『武家故実』であったが、後年には、『国民生活』の研究を講じておられる。その間に、『国文学研究法』がさしはさまれている。先生の処女出版である『石叫ばむ』が国民生活叢書の第一篇として刊行され、その序に、国民的生活の契力は、国民生活の基礎の上に打ち建てられた、新しい秩序の創造と信念の教養とに在らねばならぬことを力説しておられるように、文学研究者としての先生が、国文学の根底に、国民生活があるということを発見されたところに、先生の学説の根底が樹立されていることは注目し得る。先生の国語教育論は先生の文学研究から導かれているが、さらにその根底は、国民生活の探究と創造に裏づけられていることを見落してはならない。先生の『國語の力』が三十年後の今日、なお有力な課題を提示し、新鮮な情熱を喚起するのはこの故である。」(有朋堂版『國語の力』補説、三六)

と述べていられる。垣内先生の国語教育論がその文学研究から導かれつつ、さらにその根底には、国民生活の探究と創造が存したというこの指摘は卓見である。この観点から「石叫ばむ」と「國語の力」の関連も、見ていくことができるであろう。「石叫ばむ」は、垣内先生の国民生活史研究のまとめの一つであると同時に、それは

「國語の力」をはじめとする垣内国語教育学の基礎の一つでもあったとみることができよう。

三二

「國語の力」成立以前の、垣内先生の研究状況については、みずから、

「文学形態学を手にしたのは大正四年であった。其頃までは、文学作品を韻文・散文に二大別して、その特性を解説するのが一般の情勢であった。形態学は先ずその雑然とした考え方を根底から打ち砕いたものであった。(中略)形態学は、そうした伝統的な考えをとらないで、先ず文学世界の鳥瞰図を描き、文学作品群の在り方、その相互関係を整理することを、その目標とするのであった。これだけの事を見ても、その当時の、また現在に至るまで引続いて居る文学の研究の根本的革新を示唆する考え方であったことは言うまでもない。この基準から観ると、我が國の文学に関する研究は殆んど文学地図さえもっていない情態にあつたから、はかなくしく進めない。故にそれは直ちにその批判と見てもよいほどであった。それで、大正四年以後の数年間はこうした立場から、日本文学の理論的、歴史的考察を整理することが、当面の主要な課題であった。しかし、前に述べた如く、それは自分の問題とは別のものであるから、これに対して、内心の抗争を抑止することの出来ないものがあった。(中略)唯、今から思い出して見ると、自分の属する学界の現状に不満であり、外來の学説を統合するほどの定見もなく、徒らに焦躁の数年が過ぎたように思う。孤立の状況が目立って來たの

も、この頃からである。」(「言語形象性を語る」、二二―二五
頁)

と述べていられる。

この当時の、垣内先生の東大における講義については、西尾実先生が、つぎのように述べている。

「わたくしは、大正元年九月から大正四年七月まで、東大の国文学科で、垣内松三先生の『武家故事』と『国文学研究法』の講義を伺った。(中略)垣内先生が大正三年九月から大正四年七月にわたって講義された『国文学研究法』は、イギリス、フランス、ドイツなどにおける文学研究法を紹介されながら、日本文学の研究に関する方法体系を樹立されようと試みられたものの一部分であったと記憶する。わけても、ドイツ文獻学の Karl Eise の方法体系を分析され、日本文学研究法の未開拓が解釈から批判への發展にあることを指摘されたときは、今にいたっても、適切な批判であったと思われる。」(「国語と国文学」三四三号、昭和27年11月号、四八―五〇頁)

また、斎藤清衛先生は、当時の東大における「国文学研究法」の講義内容について、

1 「しからば、教授が、文科大学に於て最初発表された研究法の内容はいかなるものであったかというに、その大系は斬新というよりも寧ろ穩当に近いものであったといふべきである。序論の次に、文書批評・語釈法・内語論の三章が次々に出され、ベークの学説の参照されていた外、エルチエの研究分類法なども引用されていた。こうした文芸哲学以前のドイツ文学研究法に就てはこれを紹介祖述するといふより、寧ろ日本文学の立場より批判的に参考にして

ゆくという方法であつて、これらの教授の学説を、ドイツ学説の踏襲などと評するのは全く一片の誣言にすぎない。思淵の展開に就ては、モウルトンの文学論が引かれ、語象の問題ではクロチエの美学論が参考とされていた。のみならず、文学の研究は、作品の理解に始まり、批判に終るとするドイツ的の学説は、夙にわれわれにも承認されているところで、教授の説は理解の方法を創作の心理過程に對し逆行せんとする深みを有しているものに過ぎなかつたのである。

特に、教授の態度を以て、文獻学、書目学的研究を輕視するもののように憶測するのは早計の甚だしいものであり『第二章、書目学』の中では、周到微密な資料さえが掲げられていた。曾て、自分は躬ら教授の蒐集された書目カードを借覽したこともあつたが、後に毛利氏との共著とはなつてゐるが『国文学書目集覽』の編述を見るを得た如きも教授としては偶然のことではないのである。

さてこの關係は、第三章の註釈研究の態度にも闡明されてゐるところであるが、その立場はつねに認識の統一という点に係つてゐる。一、表現の研究。二、語象の闡明。三、内容探求はその章の要目となつてゐたものであるが、後の解釈学的学説の萌芽はそこから誰にも充分窺取されるだろう。当時、ディルタイの解釈学説は未だ日本には紹介されていなかった。教授も勿論、介意されなかつたらしいのであるが、教授の解釈法が多くの点でドイツの解釈学と契合している事實は興味なしには考へることを許されない。

かくて、註釈法は、第四篇の内語論に到つて、註釈と批評との一致融合を示してくる。その内語という言葉は、かのヒュイ等心理学者の内語をそのままに踏襲されたものらしかったが、この一篇の内

容は、同時に文学本質論を構成するものと評することが出来る。特に『心』と『語』との融和点の上に語象を定位置づけんとするその立場は、教授の後年の学説の中心をなす形象理論を予想せしめるに充分であった。読みの心理についても、眼球の運動とか身振とか生理学的説明の多いのは、教授の学風の心理的一面を語るに足りていよう。その他、想形、想態、想韻等の各章は、叙述的機構、表現的機構、象徴的機構などというように発展していった後年の文学形象論を想像さすに足る。かくて『容観批評の終点』という一篇を以て、この『国文学研究法』は結ばれていたのである。」(雑誌「コトバ」8の1、昭和13年2月1日、コトバの余刊、三五―三六)

・2 「自分は、大正五、六年前後在学していたものであるが、その間、幸い、先生の講筈に終始列ることが出来た。(中略)特に、『国文学研究法』という題目のものには、多く、独自の文芸学が参照されてあったが、体系的に研究法というものを持たなかった自分の如きは、少からずその聴講によって啓発せられた。即ち、その第一篇の中に研究部門として提示された心理学的・純文学的・民族性的三分類に就てもそうであるが、スタインタール、パウエル、ヴェントの流を持つ心理学的研究を日本文学に応用する企などは全く無かった時代なのであった。その講義内容では、エルテネヤベークヤの説が悉しく紹介され、エルマアティンゲルとか、ディルタイとかの名は未だ聞かれなかったけれど、英米の学者の名としては、すでにモルトンが出され、勿論ヒュイの如きも出されていた。なお、先生の形象学理論はその中にも予見されていたので、自分は、第三篇、『内語論』に最も多く興味を抱かされた。文学は言語を以て表象された意識の流れであるがために、読者にとっては、同時的、非

分析的の全一体であるというようなことが、その冒頭に於て述べられてあったと記憶する。その他、先生が、術語に凝られる態度はその当時から顯著であつて、想形・想態・想韻などという自分には始めて耳にするような用語が続出された。更に、一般に於ける心理的研究には、先生の研究が絶えず初等国語教育と關連していることを裏書するものが多く、言語が『文』を単位とすべき説なども屢々繰更されていたように思ふ。なお、当時、近世文学を研究題目としていた一友人が、先生の『国文学研究法』には何等応用すべきものがないと嘆息していたのを耳にしたが、近松や西鶴やに關してもその因襲的研究範囲では、全く交渉なき方法論であつたこともまた間違いないところであろう。この点、とにかく先生の講義は一般から好感を持たれなかつたということが憚りなく云へるかもしれない。」(雑誌「国語教室」4の1、昭和13年1月1日、文学社刊、九―一八)

3 「簡えば、自分は、大正四年に初めて、先生の大学の講義を聴講した一学徒のだが、その年の講義題目は『日本文学の背景』と『国文学研究法』という二面になつて居た。(中略)なお垣内学には、文学として何等か中世的の香り、仏教としては禪的なものが、かざされて対象化されている点争えぬところである。先生の大学院在学中の研究論文題目も『国学の発端』というのであつた。これは先師芳賀教授の思想の影響によるものであるが、結構、垣内学の中には一人の哲人と一人の科学者とのあやしくも、微妙な混合が見られる。そのために、評論においても、『執筆の手順、研究の方法』ということ恒に口癖の様に出されていたが、講義題目としての『国文学研究法』も、その半ばは、文藝批評・解釈・形象等の理

論であつて、方法の實際指導に直る部分は極めて稀であつた。先生の講義について、これを當時、『序論講義』と批評し陰口をきく学生も居たのだが、ある講義においては最初の方法理論があまり詳細にすぎた嫌いのものも実は無いではなかつた。しかし、研究法は、自然科学においてだけでなく、人文科学においてもまた肝要な根基をなすものである。特に、垣内学の研究方法の内容は、英仏学からはモルトン説の如きを容れると共に、他方ドイツからは解釈学を採用されるという風で、その結果、古典に関する機会にも極めて斬新なものが見られた。大正十二年『講座』（大村書店）の中で発表された『自照の文学』はその点著しい例証であるが、かの名著『国語の力』の中にも、断片的ながら、その類の新解釈がしばしば窺われる。もっとも、『国語の力』という書名などが暗示してもいるように、国文学の研究も、ことばの問題に大半の努力が注がれていたこととは事實である。『国文学研究法』の講義の序で、先生自ら、文学研究には『言語研究』『審美研究』『国民性研究』の三分野のあることを指摘されていたが、審美研究では、エルスター説に準じ、文学科学の如き問題が特に重視されていた。』（『国語と国文学』三四三号、昭和27年11月号、四五―四六六）

4 大正四年の秋、わたくしは当時の東京帝國大学の文科大学に入學し垣内先生の講義を聴いた。その中『日本文学研究法』と題された方の講義は、第一章が『方法論の方法』という題目となつていただけに方法の具体的解説というより、むしろ方法論であり文学の思想的釈明の部分の多いのに、いささか面喰つた。しかし講義の時間毎に、何か深刻な暗示をうけるといふ風で、それはアルプスの諸嶺を埋め淡々とした雲霧の間に展望される状にも比較されて、研

究の便りは明らかでも、その実体は充分に掴めないという心理にも類するものであつた。』（有朋堂版『国語の力』補説、昭和28年8月29日、九一―一〇六）と述べていられる。

以上、垣内先生の『国文学研究法』の講義がおよそどのようなものであつたかが、大正三年、四年、五年の聴講者であつた西尾・齋藤両先生によつて述べられている。垣内先生がモルトンの「文学形態学」を入手されたのは大正四年であるから、この時の講義には、すでにそれが参考にされ、とり入れられていたわけである。『国文学研究法』の講義は、すでに、明治四三年に、東洋大学、東京女高師においてなされている。東洋大学においても、大正三年から開講されている。また、大正九年には、東洋大学において、『日本文学思潮』とともに、『日本文学研究法』を講義された。これらのうち、東大における『国文学研究法』の内容は、すでに西尾、齋藤両先生が回想して述べていられるが、のちの『国語の力』の内容の基礎資料となつていると見ていいであらう。『国語の力』の「序」に、「第一巻は研究法・批評学及び言語学的諸研究・文学概論を整理して、これを『読む』という作用の上に集め、『説方』といふことを實際に結びつけて新しい仕方で話して見たいと思つたのである。」（有朋堂版『国語の力』序、二六）とあるように、『研究法』、『批評学』、『言語学的諸研究』などは、すでに年来、『国文学研究法』において、求めつづけてこられたものであつて、それらが『国語の力』において、新しい形で整理され、まとめられたのである。

講義『国文学研究法』が、『国語の力』の成立に、とくに大きい

役割をはたしていることは、西尾・斎藤両先生の回想、記述されている講義から推察しても、認められるであろう。

なお、「国語の力」のまとめられる有力な契機をなした長野講演についても、西尾寅先生が垣内先生を講師として推薦されたのは、「東大における『国文学研究法』」の感銘をよりどころとしたもので、先生が国語教育のことをどう考えておられるかは何も知らなかったのである。」（「国語と国文学」三四三号、昭和27年11月号、五〇べ）と、西尾先生みずから述べられていて、「国文学研究法」が直接の機縁の一つになっていたことを知ることができる。

注1 長野講演において、西尾寅先生が垣内先生を迎えられるようになった事情については、このほかに、雑誌「国語教室」(4の1、昭和13年1月1日、文学社刊、二七べ)にも、また、「国語と国文学」(三四三号、昭和27年11月号、五〇べ)にも、記されている。

注2 田部重治氏、不老閣(中西浜太郎氏)、垣内松三先生の接近については、田部重治氏の「垣内松三君の思い出」(雑誌「実践国語」一三の一四七、昭和27年11月1日、穂波出版社刊、六九べ)に述べられている。

注3 この問題については、雑誌「国語教育研究」(广大教育学部光葉会、昭和35年2月10日刊)の小稿「国語の力(垣内松三著)について」を参照されたい。

注4 この書名について、西尾寅先生は、「先生の最初の著書は『石叫ばむ』であったかと思う。この書名は、おそらく、バイブルのなかの文句から採られたものであろうと思われる。」(「国語と国文学」三四三号、昭和27年11月号、四九

べ)と述べられている。

(昭和35年10月2日稿)

(本学助教授)